

進化経済学会ニューズレター No. 12

May 2002

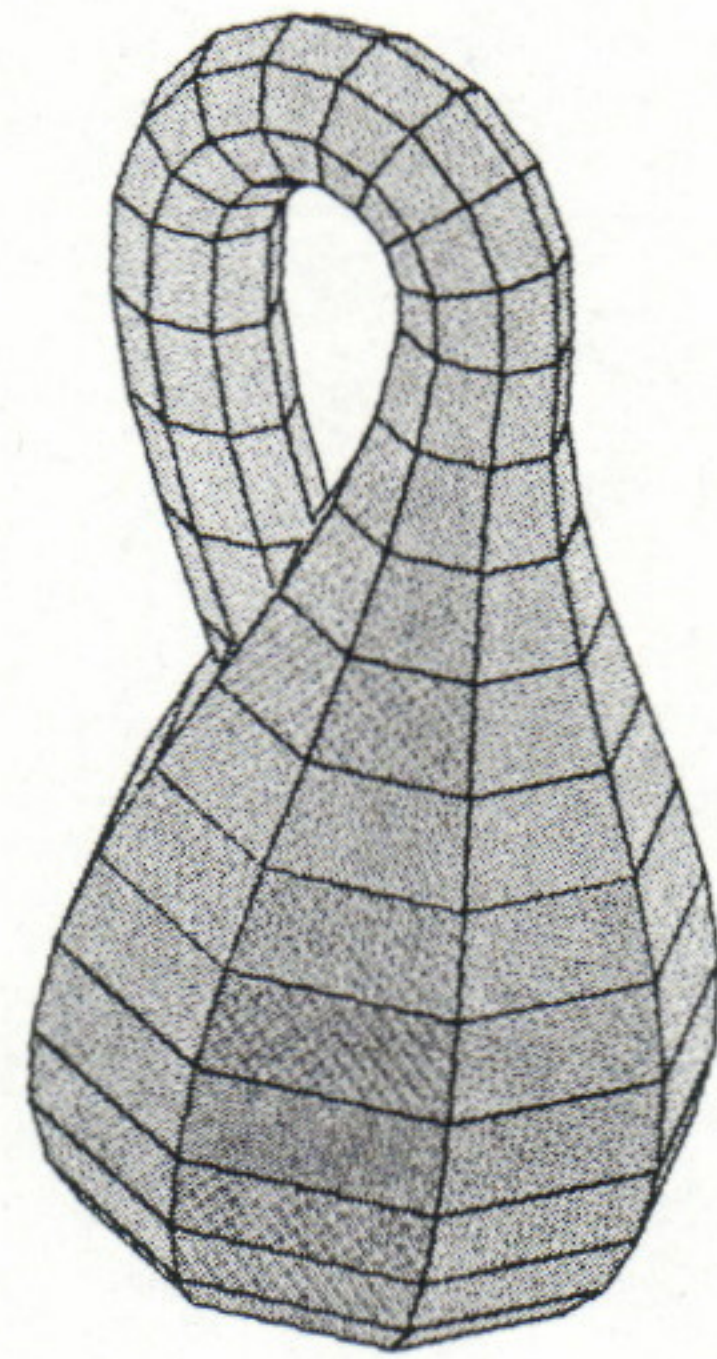
進化経済学会事務局

606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学部気付

URL://www.econ.kyoto-u.ac.jp/societies/evolution

Tel.075-753-3427/3455 Fax:075-753-3492 e-mail:yagi@econ.kyoto-u.ac.jp

郵便振替口座：01030-1-22493 (進化経済学会)



記事

第6回大阪(千里山)大会概要報告

国際シンポジウム開催報告

第6回会員総会報告

第II期第6回理事会報告

2001年度部会活動報告

入会者名簿

中村量空会員追悼

書評：吉田和男編『複雑系経済学へのアプローチ』

第7回東京(専修大学・生田)大会CFP

オータム・コンファレンス

関連学会案内

役員選挙について

事務局から

第6回大阪(千里山)大会概要報告

第6回進化経済学会大阪(千里山)大会は、「知識・組織・社会のイノベーションと進化経済学」を統一テーマとして、千里山キャンパスがほぼ満開に染まった2002年3月29日(金)と30日(土)の両日に関西大学で開催されましたが、非会員や外国からのゲストを含めて約200名の参加者が大会を盛り上げ無事終了しました。

今大会のプログラムは、「経済学の再生をめざして」「進化ゲームとシミュレーション」「技術革新と経済」「市場と進化」「進化と社会システム」といった前回の福岡大会を継承するセッションと、「制度設計と知のあり方」や「U-Mart—人工市場研究から制度設計へ—」という特別企画セッション、「進化と移行」の国際セッションから構成されていますが、これらのセッションでの報告と討論を通じて「新しい制度をデザインしようとするとき、知識をどのように整理=統合して使うべきか、そのような知識と制度進化はどのような関連をもっているのか」という問いが深められました。「進化経済学から制度設計をいかに構想するか」という問題は継続して議論されるべきテーマだと思っています。

ところで、大会を盛り上げたセッションのひとつが「ポスターセッション」でした。非会員の参加者の展示参加を今年から無料にしたことや参加申し込み締め切りを2月末まで延長したこともあって、20の申し込みがありました。大会プログラムのなかに初めて「ポスターセッション1分間スピーチ」の時間帯を正式に設けましたが、院生を含む多くの若手研究者が熱心に参加していました。これは実験的な試みでしたが、運営委員会では「成功」だったと総括しています。

しかし、反省すべき点もあります。運営委員会としては努力しましたが、前回に続いて「経済史プロパーのセッション」は作れませんでした。また、前回の大会で重視された思想史関連のセッションが本大会では手薄になりました。退会者のなかに、また大会を欠席される方のなかに、経済学史や思想史関係の会員が多いことを考えると、「歴史にフレンドリー」なセッションを掘り起こす必要があるように思われます。

最後になりましたが、ご協力いただいた報告者、討論者、司会者、そして会長・副会長と本部事務局理事、手伝ってくれた学生のみなさんに対して、大会運営委員会を代表して厚くお礼申し上げます。

大会運営委員長 若森章孝

* * * * *

国際シンポジウム(進化と移行)総括報告

1. 進化経済学会国際シンポジウム (Evolution/Transition) は、3月28-29日の2日間に京都大学と関西大学で、国際交流基金と京都大学経済学会の助成を得て開催

されました。2日間で9人の海外からのゲストを含む19人のプレゼンテーションがおこなわれ、討論もまた実りのあるものでした。ある海外からの参加者は、東欧・ロシアだけでなく中国をも包括してこんなにインテンシブな議論がおこなわれたのは珍しいと言ってくれました。「インテンシブ」の意味が、割り当て時間の短さを指すのでなければ良いのですが・・・。

シンポジウムは第1部「移行の多様な経路」と第2部「移行の進化的・制度的理論」という2部に分かれていました。第1部は28日の朝から晩までのフルデイ・セッションとして京都大学経済学部の大会議室で行われ、また第2部は29日の午後に進化経済学会大会の国際セッションとして関西大学経済学部のA501教室で行われました。参加者は、2日合わせて80人ぐらいかと思います。進化経済学会の会員以外にも、北大の吉野悦雄教授、京大の山本裕美教授に報告をお願いしましたし、また大阪市大の佐々木信彰教授には中国セッションの司会ーロシア・東欧セッションの司会は門脇延行会員(滋賀大学)ーをお勤めいただきました。

2. 第1部の冒頭に行われたのはベルナル・シャバンス(パリ第7大学)の「なぜ社会主義後の転形の国民的軌道が違ってくるのか?」という報告でした。移行経済においてあらわれた経路依存性と制度補完性についての理解を深めようとしたこの報告は、移行経済の理論化を分類して整理した田中宏(立命館大学)の「移行経済理論の類型化のこころみ」と補い合って第1部の討論の全体的構図を与えるものでした。

第1部の報告と討論の全体を振りかえっ

て移行経済における経路問題を考えてみましょう。経路依存性というと、現在の(多様な)状態を過去の(微細な)差異の産物として説明することになりますから、移行開始時の〈初期条件〉を固定的にとらえて、それが以後の経路を決定するという理論(田中の分類では〈相続-原因〉理論)に陥りがちです。しかし、田中もいうように、初期条件に端を発するものであっても、移行の過程自体においてそれが作用することが重要です(田中の分類では〈移行過程-原因〉理論)。こうした移行過程のただなかで働く要因として多くの報告者が重視したのは、一方で経済過程から過剰退出したかと思えば他方で財閥や私党と結びついて恣意的な行動に出る政府あるいは政治システムのあり方でした。また、多くの報告者は、公式に導入・施行される制度の下にある「インフォーマル・ルール」、経済主体の行動様式に注目しました。これらを生み出す〈基層社会〉(伝統的な習慣・文化・価値観・生活様式をもったコミュニティ)もまた、政治システムと並んで移行過程の経路を規定する要因でしょう。

田中は、経済の地域的統合の状態も移行過程の規定要因としてあげていますが、今回のシンポジウムではこの要因については、富森虔児(桜美林大学)報告「ポーランド・ドイツ間貿易とポーランドの経済成長」がドイツ・ポーランド間の貿易の発展をとりあげ、山本裕美報告「中国における経済改革の進化」が中国の市場開放とWTO加盟問題について触れるにとどまりました。

しかし、それを無視すると〈経路依存性〉の認識が決定論的な認識に墮してしまうと私に思われる要因があります。それは、

シャバンスが J. R. コモンズの表現を借りて〈未来像 futurity〉と名づけた要因です。未来がどうなるかを人々が予想することは、当然のことに、人々の行動に影響しますから、それは経路を形成する重要な要因の一つです。しかし、人々に未来のビジョンを与えたとしても、それが現実の経済行動の変容や経路形成の政策と結びつかないかぎり、それは基礎のない願望、マルクス主義者の用語を用いれば、現実を覆い隠す〈イデオロギー〉にとどまるでしょう。体制移行にともなう摩擦の数年が過ぎれば〈自由な市場経済〉が作動するというビジョンは、行動様式と政策の不整合状態を正当化し続けたのです。経路形成的なく未来像〉は、人々の行動に結びつく現実的な政策体系を方向付けるものでなければならぬでしょう。

3. カジミール・ポズナンスキー（ワシントン大学）「資本主義を共産主義者のやり方で創る—東欧の欠陥だらけの移行」は、移行過程における国家はその影響力を弱めたのではなく、逆に国家資産の配分という決定的な役割を獲得したと論じました。彼によれば、移行過程の国家は、共産主義時代とまったく同じ思考・行動様式を維持しながらそれにあたり、国民が長期にわたって築き上げた資産を毀損したり外国資本に安値で売り渡し、結果としてモラルの荒廃をもたらした。モラルの問題を国家・政治システムの側からではなく、家族を核とした基層社会の側から論じたのは、吉野悦雄（北海道大学）「社会分析の総合的シンボルとしての家族—中欧の歴史的視点から」でした。吉野は、家族関係およびそれと結びついたモラルが歴史的過去を深く背負っ

ていることを指摘するとともに、移行過程初期の東中欧諸国 GDP 低下率と移民比率の間に印象的な相関関係があることを指摘しました。

大津定美（神戸大学）「ロシア移行の10年の代替的ビジョンを求めて—市場ボルシェビズムとロシア・マフィアの間でのサバイバル」は、長期にわたる経済的破局状況のなかでロシア社会がどのようにして生き延びたかと問いかけて、非公式の闇経済がその支えであったと答えました。闇経済は腐敗と犯罪の温床であるとともに、それによって人々が生きてきた支柱でした。それは、移行過程において、〈基層社会〉と〈政治システム〉の複合的結果として肥大した現象です。溝端佐登史（京都大学）

「経済転形からの教訓—ロシアにおける経済主体とその行動」もまた、ロシアにおける「インフォーマル経済」に注目し、ロシア企業の行動をいびつな形で形成された市場への適応として解釈しました。

ディミター・ヤルナゾフ（京都大学）「進化的視点からみたブルガリアにおける経済移行—カレンシー・ボードと EU 加盟の展望」は、政治的システムの不安定性によって動揺したブルガリア経済が、通貨価値の管理を強制するカレンシー・ボードの設置により安定に向い、また EU 加盟交渉に向けての条件整備が安定後の目標になっていると論じました。政府・金融機関のルーズな行動を禁止するカレンシー・ボードは、市民社会による政治システム改革を望めない状態での現実的な選択肢でした。また政治家だけでなく国民にも支持されている EU 加盟の展望は、シャバンスのいう〈未来像〉の好例でしょう。

4. 第1部の後半は、中国経済を論じた5報告のプレゼンテーションでした。これらの報告についても、〈政治システム〉〈基層社会〉〈未来像〉という経路を規定する要因をピックアップすることができるでしょう。ここでは、しばしば「漸進主義」の代表例とされる中国の移行の実態が、政治システム内部で繰り返される権力闘争・妥協の結果としてジグザグ状に進行した過程であることが示されました。この過程には、農民をはじめとした地域社会の伝統的な行動様式、重層的な政府機構のもとでの官僚的心性も影響します。山本は中国の経済改革は政治システムに規定されてジグザグ型で進行したとみていますが、同時に、復活した市場経済化のなかで伝統的な行動様式（「包」）の再生が見られることも指摘しています。史正富（復旦大学）「制度変化における合理性と経路依存—ポスト毛期における農業改革の場合」は、農業における「農家責任制」の導入が、農民の希望と党委員会におけるリーダーシップとの関連で多様な経緯を辿ったことを示した上で、改革の速度は経済的効率性の認識、取引費用、政治的正統性の3要素の関数であるという仮説を提示しました。また、彼は政治システム内部において改革の意味付け（〈未来像〉）における進化的な学習がおきたということで、共産主義者のもとで民営化が起きた謎に答えようとしていました。

中央と地方の政府間関係から、中国の政治システムの経済への影響を考察しようとしたのは馮興元（中国社会科学院農村開発研究センター）「中国における政府間競争と財政関係を規制するルールの進化」と馮鋭（大阪市立大学大学院生）「市場経済移

行期における中国産業政策における中央政府と地方政府の関係」の2報告でした。馮興元は、1980年代以来中国では管理権限の分権化とともに中央政府と地方政府のあいだに「財政契約システム」が生まれたが、それは財政欠陥に悩む中央政府の要求に対応するために地方政府は独自課税や予算外収入の拡大をはかるという悪循環をともなると論じました。馮鋭は、産業政策の立案・実施において実施主体である地方政府と認可主体である中央政府の間に利得と取引費用負担をめぐるゲームがおこなわれていると解釈し、地方政府がしばしば中央政府を出しぬいて産業政策の全体的目標の達成を妨げると論じました。

中国関係の5報告のうち、漸進主義に対して最も挑戦的であったのは宋磊（名古屋大学研究員）「中国経済のアキレス腱—大規模移行経済における制度進化過程」でした。彼は、レギュレーション理論の2つの柱である賃労働関係と需要体制の概念を中国移行経済に適用して、両者の制度的脆弱性を指摘しました。彼の見解に拠れば、中国経済は敗者が少なくすんだ移行過程の段階を終えはじめていて、社会的な安定と両立する蓄積のための制度整備を急がなければならないということになります。

5. 第2日には、理論的な志向をもった5論文とその討論がおこなわれました。はじめに司会の八木が前日の報告および討論の紹介をおこなったあと、ウラディミール・マエフスキー（ロシア科学アカデミー経済研究所進化経済学センター長）が演壇にたち、「進化経済学と現代ロシア経済の諸問題」について論じました。彼は、イノベーターによる経済進化というシュンペー

ターのビジョンをロシア経済に適用して、1992-98年のロシア経済の低迷をイノベーターにとっての政策環境の悪化によるものとして説明しました。その上で、マエフスキーは、産業の技術的基礎をなす機械工業部門におけるイノベーターへの金融支援（信用供与）をロシアにおいて積極的な経済進化を促進する政策として強調しました。アリヤ・カンタルバエーバ（ジョージ・ワシントン大学）「ポスト共産主義移行経済における望ましからざる規範の持続」は、形式的な制度は成立したがそれを機能不全にするような行動様式が蔓延しているロシア、NIS諸国の状況を、最適な特質をもった個体を選択されるダーウィンの淘汰とは異なるカストラー的淘汰（初期条件が決定的）による進化的過程の帰結として論じました。

エリック・マーニョン（パリ第7大学）

「移行過程の進化的制度的接近への一貢献」は、契約論的アプローチを斥けて組織論的アプローチを立脚点として選び、移行経済における多様性を各レベルの〈制度的場〉の複合として説明しました。富森虔児（桜美林大学）「ポーランド・ドイツ間貿易とポーランドの経済成長—自己組織理論を基礎にした説明」は、ポーランド・ドイツ間貿易の急成長を、企業・産業領域において次々に関連しあいながら生じた自己組織的な過程として説明しました。これに関して、ハンス・ペーター・ブルンナー（アジア開発銀行）とポズナンスキーによる、貿易の商品構成、ポーランド側の貿易赤字と経済成長の関連についての討論がありました。

2日目の報告者の多くが生物学的な用語を用いたのに対して、盛洪（北京天則経済研究所）「移行経済学の一般理論をめざし

て」の立場は、所有権の境界付けのもとで交渉を促進させることによって効率の増進をはかるという新制度主義でした。しかし、移行における最大の問題は利害対立であると考える盛洪は、古い制度を新しい制度と並べて維持しながら、割当型の旧制度の生み出す権利・義務を交渉可能にすることによって、利害対立を引き起こさずに旧制度を漸次衰滅させる戦略を提唱しました。漸進主義、あるいは双軌制の新しい理論化というべきこの提案は、参加者のあいだで大きな関心をよびましたが、討論の時間が少なかったのが残念でした。予定討論者のブルンナーに割り当てられた時間が短縮されたのも残念でしたが、彼は会場で配布された討論要旨で、経済進化を複雑性の発展と捉える視角から、複雑度の低い社会では生産要素が社会生活と結合しあっていてその活用が困難であること、ホールドアップ問題が解決されない状況下では金融仲介が成立せず、特定用途に向けた信用供与もすぐにレント漁りの場になることを指摘しました。

6. 第2日のセッションは、理論的総括がなされずに終わったのが残念でしたが、司会者は参加者のすべてに、シンポジウムの総括あるいは感想を送るよう依頼しました。ブルンナーのコメントの最後に記した以下の文章は、制度変革の過程にある日本経済を考える際にも私たちに激励するものです。

「移行過程に影響を与えようとして働く人々は、進化経済学というツールを有している。進化経済学は移行の科学にほかならない。」

組織責任者：八木紀一郎（京都大学）

第6回会員総会報告

日時；2002年3月30日（土）

関西大学にて

1. 議長として、山田鋭夫会員を選出した。
2. 瀬地山会長が挨拶。物故会員の逝去を悼んで黙祷。
3. 八木常任理事から会員状況の報告があり、入会者の承認がおこなわれた。第5回理事会で15会員（うち物故者3）、第6回理事会で6会員（うち物故者1）の退会が報告され、また、「河合文化教育研究所経済研究会」（名古屋）は「河合文化教育研究所（京都）」の複数アドレス扱いとすることで団体会員も1減となる。それに対して、入会希望者は第6回理事会での資格審査者が25名、また、第5回理事会での資格審査者が11名あった。総会では、第6回理事会での資格審査者のリストしか提示されなかったが、第5回理事会での資格審査者については『ニューズレター』第11号でリストを示しているので、第5回理事会資格審査者についても、この会員総会で一括して入会が承認されたものとして解釈させていただきます。先の退会者と相殺すれば、来年度開始時点の会員数は594（うち院生扱い会員74、団体賛助会員1）となる。
4. 吉田常任理事から会計状況報告があった。（理事会報告の第2項を参照。）また、決算書が監事の署名とともに提示され承認された。（『ニューズレター』第11号参照）
5. 続いて、平成14年度予算に関して議論された。この予算には本年度選挙があるために、その予算が組み入れられていることが説明された。その概要は以下のとおり：

収入 前年度繰越 2,000,000 円、会費 5,510,000 円、計 7,510,000 円。

支出 大会開催費 1,500,000 円、事務費 300,000 円、交通費 600,000 円、部会等補助費 250,000 円、人件費 390,000 円、会議費 200,000 円、通信費（選挙資料発送含む）650,000 円、印刷費 200,000 円、謝金 200,000 円、送金手数料 40,000 円、会員名簿（選挙権者名簿）作成費 200,000 円、出版費 1,500,000 円

小計 6,030,000 円

平成15年度への繰越金 1,480,000 円

総計 7,510,000 円

6. 第6回大会の実施状況が若森常任理事から説明された。ポスター・セッションなどを含め、30名近くの非会員が参加して学会を盛り上げている。当然出席と予想できる会員でも、出欠通知（はがき）をいただかないと、事務上支障をきたすので留意されたい、など。

第7回大会は、宮本常任理事を中心にして専修大学でおこなわれるが、会場の都合から生田校舎にせざるをえないので、ご注意いただきたいとのことであった。

7. 吉田常任理事から、前日の理事会での審議をふまえて、「役員選挙細則」にしたがって役員選挙を実施することがはかられ、決定された。選挙管理委員として、理事会の推薦した磯谷明德、水口雅夫、荒川章義の3会員が承認された。実施のめやすとして、今年6月に投票用紙と選挙権者名簿を郵送し投票を依頼、7月に開票・結果確認、9月の理事会に結果報告、来年3月の会員総会で新役員決定、引継ぎ理事会開催、というスケジュールが示された。なお、会長・副会長・推薦理事などの候補者は理事会で

決定されているが、選挙管理委員会の投票資料によって全会員に通知される。

8. ゲネシス2を担当している八木編集委員から、収録論文の入れ替え・翻訳などで作業が遅れているが、夏休み明け刊行をめざしているという弁明があった。また、ゲネシス3の準備状況について、担当の瀬地山会長から説明された。なお、英文国際誌の刊行について、理事会や拡大編集委員会で具体案の検討がすすめられている。(『ニューズレター』第11号参照)

9. 九州部会、非線形問題研究部会、制度の政治経済学部会、現代日本の経済制度研究部会の活動報告があった。また、弘岡正明・瀬地山敏両会員のよびかけた「イノベーション研究会」が理事会により部会として承認されたことが伝えられた。

10. その他議題として、八木常任理事から、学会の出版活動や電子媒体での広報活動の展開のために、学会の出版物や報告集に関する学会の権利を確定しておく必要があるとして、次のような決議の案文が示された。

「本学会の刊行物(大会報告集を含む)に収録される会員の著作につき、本学会は電子媒体におけるその再生を含む著作権を有する。上記の出版や再生が相応の収益をとまなうものである場合には、学会は原著者に一定額の謝金を支払う。なお、この学会による学会員の著作の出版または再生は、原著者が他の刊行物や媒体においてその著作を利用することを妨げるものではない。非学会員の著作についても、上記の合意を得るようにつとめる。」

討議のなかで、原著者の意思の尊重という第3のセンテンスはもつともであるが、形式上は届け出と了承が必要であろう、し

かし、大会報告についてまでそのような形式的規制を及ぼすべきではないだろうという意見が出され。その結果、第3センテンスは次のように変えられた。

「原著者が他の刊行物や媒体においてその著作を利用する場合は、事前に届けて了承を得る*。」

*ただし、大会報告の原稿を原著者が、他学会・他媒体などに投稿・公表することについては事前届出は不要である。」

第II期第6回理事会報告

日時；2002年3月29日(金) 関西大学
22 理事、6 理事委任、会長、副会長、2 監査委員出席

1 吉田常任理事から会員状況の報告があった。第5回理事会以降、物故会員1名を含む6名の退会希望があり、また団体会員であった河合塾経済研究会の退会希望があった。これに関して承認された。その後、今回理事会への入会申し込み者25名について審査され、承認された。この結果、会員総数は594名であり、一般会員519名、院生会員74名、賛助会員1団体となる。入会希望者の中の一般企業の勤務者について、推薦者2名の入会条件を充たせば歓迎すべきであろうという意見があり、承認された。入会希望者については総会にはかられることとされた。

学会規定によれば3年以上の会費未納者は会員資格を失うこととなっているが、3年間の滞納者(2002年3月15日現在であり、3月末に払い込まればこれに該当しない)が23名あり、4年以上の滞納者が40名いることが報告された。これに対して、

次回の会費請求時にこの旨を明記して請求することとし、もし、退会希望が出された場合には、滞納会費の2分の1を免除することを明記して請求することとされた。会員資格に関しては次回の理事会で検討することとされた。

2 会計報告が行われ、平成13年度の会計状況について吉田常任理事から報告された。現在(平成14年3月15日)までの収入が約8百万円、支出が約5百万円である程度の繰越金が見込まれることが報告された。支出の中で、英文出版 *Evolutionary Controversies in Economics* の購入費約165万円が含まれているが、これは有料配布なので収入ないし資産になる。これに対する収入が約25万円ある旨、報告された。なお、常任理事会で現段階で31万円の借入金(学会設立時に設立関連者から借り入れたもの)があるが、これは資金繰りの関係であり、もう返済すべきとの議論があり、実行されることとなった。

3 平成14年度予算に関して議論された。この予算には本年度選挙があるために、その予算が組み入れられていることが説明され、総会に付議することに関して承認された。

4 進化経済学会は平成15年度に第Ⅲ期を迎えることとなり、平成14年度中に役員選挙を行う必要がある。これに関して、常任理事会において実施日程が検討され、別紙のような案が提案され、承認された。選挙管理委員会について、常任理事会で磯谷常任理事を中心に選挙管理委員会を組織することが提案され、理事会で承認されて磯谷明德(九州大学)、水口雅夫(九州産業大学)、荒川章義(九州大学)の3会員を管

理委員会メンバーとして、総会に提案することで合意された。

5 理事会推薦役員に関しての常任理事会での検討結果について吉田常任理事から報告があった。会長の選出に関しては規定では副会長を候補者として信任投票によることとされている。これに対して、本会はまだテイクオフ前であるので瀬地山現会長の続投を望む意見もあったが、規則通り現副会長の塩沢由典氏を会長候補の信任投票とすることが常任理事会で妥当とされ、理事会に提案され承認された。

副会長候補者に関しては常任理事会で、前回の選挙では発足から三年ということもあり、分野別のバランスを考えて候補者を選定した。常任理事会においては、今回は学会の将来を考えて選出すべきである、またとはいうもののまだ発足して間もないため発足に関わった者から選出すべきとの考えでまとまった。そこでの具体的な人選にふまえて理事会において瀬地山会長より候補者が提案され、理事会として役員選挙の候補者として承認された。

理事に関しては、半数以内を理事会推薦者の信任投票、残りを自由記名による投票とするとされている。常任理事会では、学会運営の継続性を考えて、推薦理事を選考すること(今回も基本的に現理事会推薦理事を推薦する、現会長および本部事務局経験者を推薦理事とすること)、しかし、学会運営を考えて一部は新たな候補者を入れ、推薦理事は70歳以下とすることが確認され、推薦理事候補者として15会員の氏名をあげて理事会に提案することとされた。理事会はこれを承認したが、副会長候補も含め、役員候補者の公表は選挙管理委員会

によっておこなわれる。なお、事務局理事は、新会長によって新理事会において指名されることとなる。

6 吉田理事より八木理事が中心となって進めているゲネシス2の編集状況の説明があった。5月に原稿を出版社に渡して、9～10月頃に出版の予定であることが説明された。

7 進化経済学会大阪大会と平行して進められている進化経済学会国際シンポジウム、非線形問題研究部会、九州部会に関する報告が供覧されたが、説明は省略された。

中央大学で2002年9月に開催される「複雑系とマルチエージェント」の国際シンポジウムに関する後援の依頼があり、理事会で承認された。日本経済新聞社より「第2回日経エコノフィジクス研究会シンポジウム」についての後援の依頼があり、これについても理事会で承認された。

8 宮本理事から本年9月専修大学で開催予定のオータムコンファレンスに関して、資本主義経済に関してもう一度吟味するシンポジウムを開きたいという説明があり、協力の依頼があった。

2001年度の部会活動の報告

非線形問題研究会

ホームページ

(<http://arukalab.tamacc.chuo-u.ac.jp/Nonlinear>)

A 研究会セミナーの開催

1. 2001年5月26日 中央大学企業研究所・経済研究所と共催

中央大学多摩キャンパス

生天目章氏(防衛大学校)「戦略的意思決定とミクロマクロループ」

松下貢氏(中央大学理工学部教授)「増殖と運動によるパターンの形成:バクテリア・コロニーを例として」

2. 2001年6月16日 中央大学経済研究所と共催講演会 中央大学市ヶ谷キャンパス

青木正直氏(University of California, Los Angeles, Dept. Econ.) "Finitary stochastic ways for economic modeling"

2. 2001年10月18日 sociodynamics 国際セミナー

Dirk Helbing (Institute for Economics and Traffic, TH Dresden) "Decision Theoretical Specification of the Transition Rates in his Quantitative Sociodynamics"

Yuji Aruka (Chuo Univ.) "A New Approach to Nonlinear Decision Function of Social Process: Prof. Helbing's Decision Theoretical Specification"

4. 2001年1月28日中央大学駿河台記念館
七條達弘氏(大阪府立大学経済学部)
「模倣学習モデルによるバブル経済の一考察」

藤本茂氏(防衛大学校人文社会科学群)
「グローバル公共財としての21世紀平和と安全保障」

5. 2002年1月26日

中央大学多摩キャンパス

石村直之氏(一橋大学経済学研究科)

「社会科学における微分方程式を用いた数理モデル」

B. U-Mart 公開デモの開催

2001年6月27日中央大学多摩キャンパス
「マシンエージェント vs ヒューマンエージェントによる先物株式ゲーム」

(有賀ゼミ・U-Mart 研究会と共催)

有賀裕二・松井啓之(京都大学経済学研究科)・佐藤浩(防衛大学校情報工学教室)の3氏によるレクチャーのあとU-Mart 教育用ユニットを公開デモした。参加者20名ほど。

九州部会

ホームページ

(<http://www.ip.kyusan-u.ac.jp/J?okamura.t/sinka.html>)

第20回部会研究会

2001年6月16日九州産業大学

岡村東洋光氏(九州産業大学経済学部)

「J. Rowntree の社会改良思想の特徴について」

佐々木武夫氏(西南大学商学部)

「IMF 経済危機と韓国の労使関係」

第21回部会研究会

2001年11月24日九州産業大学商学部

松尾匡氏(久留米大学)「近代の復権」

福永文美夫氏(久留米大学)

「現代組織論と新制度派経済学—ウィリアムソンとサイモンの議論をめぐって」

第22回部会研究会

2002年3月20日九州産業大学

水口雅夫氏(九州産業大学商学部)

「ローリンソン『組織と制度の経済学』をめぐって:企業論の制度主義的枠組み」

鍋島直樹氏(富山大学経済学部)「ケイン

ズとカレツキ」

討論者:池田毅氏(九州大学経済学研究院)

現代日本の経済制度研究部会

第9回研究会

2001年6月24日 京都大学芝蘭会館

新井美佐子(名古屋大院研究生)

「フォーディズムの諸類型と女性労働」

平野泰朗(福岡県大)

「高齢化と社会保険」

コメンテータ:松本淳(大阪市大)

岡本哲史

「チリ経済の衰退的レギュレーション=1830-1914年」

コメンテータ:井上泰夫(名古屋市大)

第10回研究会

2001年7月28日 京都大学法経北館1階

会議室

報告者:坂口明義(東北学院大)

「現代貨幣論の構造」

コメンテータ:大田一廣(阪南大)

報告者:清水和己(早稲田大)

「オルレアンの『金融の権力』について」

第11回研究会

2001年11月23日 京大会館

『デジタル化時代の組織革新—企業・職場の変容を検証する』(尾高煌之助、都留康編、有斐閣)について 評者:徳丸宜穂(京都大学大学院、学術振興会研究員)

リプライ:都留康(一橋大学)

『生産システムの革新と進化—日本企業におけるセル生産方式の浸透』(都留康編、日本評論社)について 評者:富田義典(佐賀大学)、リプライ:都留康(一橋大学)

第12回研究会 International Symposium
 2002年2月21日 名古屋大学経済学部第
 1会議室
 RESPONSE TO GLOBALIZATION: CASES
 OF KOREA AND JAPAN
 <Session 1> Business Cycle Theory and
 Technical Change
 <Session 2> Institutional Analysis of Labor
 Market and Firms
 <Session 3> Poverty and Expenditure
 Distribution
 <Session 4> Growth and Crisis: Regulationist
 Approaches
 (事務局：宇仁宏幸・平野泰朗)

制度の政治経済学部会

ホームページ

(<http://www.e.okayama-u.ac.jp/shimizu/pecois.html>)

(1) 2001年5月19日 場所：京都三条河合塾京都校

住沢博紀（日本女子大学）

「『第3の道』：90年代のプロジェクトか21世紀のアジェンダか：アメリカからヨーロッパへの展開」

(2) 2001年6月30日 京都三条河合塾京都校

上掛利博氏（京都府立大学）

「日本の福祉政策の現状」

松永徳芳氏（自治労）

「公共サービスの将来に関する自治労の考え」

(3) 2001年9月29日 京都三条河合塾京都校

清水耕一（岡山大学）

「35時間労働とフレキシビリティ：フランス自動車産業のケース」

コメンテーター：住沢博紀（日本女子大学）

(4) 2001年11月23日

現代日本の経済制度研究会との合同合評会

(5) 2002年2月16日 京都三条河合塾京都校

横尾昌紀（岡山大学経済学部）

“Stability, Chaos, and Multiple Attractors: A Single Agent makes a Difference”

野村正實氏（東北大学経済学部）

「『知的熟練論批判』について」

(事務局：清水耕一・長尾伸一)

部会として承認された「イノベーション研究会」も、昨年度は4回の研究回の開催など、活発な活動を開始しています。(代表：瀬地山敏・弘岡正明、事務局：徳丸宜穂)

第II期第6回理事会審査による入会承認者名簿

(郵送先・電話・メールは、新名簿に記載されますので、省略します)

氏名 (*は平成13年度からの入会扱い者)	所属 (Gは会費半額となる院生ないし院生扱い者)	研究テーマほか	推薦者
馬場 真一郎	京都大学大学院経済学研究科G	電気通信・独占	八木紀一郎 小川一仁

廣田 陽子	岡山大学経済学部	開発学	清水耕一 新村聡
伊佐 勝秀*	一橋大学大学院経済学 研究科G	生産職場における技能形成、生 産システムの動向	清水耕一 都留康
川本 信太郎	予備校講師	社会現象を成立させる社会体 制の次元	八木紀一郎 吉田和男
宮崎 哲也	九州情報大学	マーケティング研究における 進化論的視点	八木紀一郎 吉田和男
村越 一夫*	京都大学大学院経済学 研究科G	マクロ経済学・金融論	宇仁宏幸 八木紀一郎
小幡 祐士	日本橋学館大学・人文経 営学科	経済・経営におけるネットワー ク外部性の問題	齋藤實男 有賀裕二
佐藤 浩*	防衛大学校電気情報学 群情報工学科	進化型計算・マルチエージェン ト	生天目章 有賀裕二
末木 将史	中央大学大学院経済学 研究科G	ファイナンス論:資本市場にお ける情報の非対称性	有賀裕二 松本昭夫
杉若 浩孝*	神戸大学大学院経済学 研究科G	技術革新と経済分析	弘岡正明 萩原泰治
鈴木 正俊	拓殖大学政経学部	戦後日本経済、グローバリゼー ションの功罪	有泉哲 吉田和男
富田 安夫	神戸大学工学部建設学 科	都市計画・交通計画	八木紀一郎 吉田和男
渡部 幹	京都大学総合人間学部	社会心理学・進化心理学・比較 制度分析・マイクロ社会学	八木紀一郎 吉田和男
梁 峻豪*	京都大学大学院経済学 研究科G	レギュレーション・アプローチ、 労働市場分析	宇仁宏幸 八木紀一郎
道上 真由	大阪市立大学院経済学 研究科G	比較経済体制論	塩沢由典 尾近裕幸
黒宮 一太	京都大学大学院人間環 境学研究科G (学振)	ナショナリズム	宮本光晴 山下範久
佐伯 啓思	京都大学大学院人間環 境学研究科	社会経済学	宮本光晴 山下範久
柴山 桂太	滋賀大学経済学部	社会経済学	宮本光晴 山下範久
寺川 隆一郎	東京大学大学院総合文 化研究科G	制度派経済学、政治思想	宮本光晴 山下範久

原谷 直樹	東京大学大学院総合文化研究科G	経済学史、思想、特に現代オーストリア学派	宮本光晴 山下範久
松原 隆一郎	東京大学大学院総合文化研究科	社会経済学	井上彰 山下範久
山本 崇広	東京大学大学院経済学研究科G	市場秩序、自由論	宮本光晴 山下範久
千葉 直幸	三谷商事(株)	マクロ経済理論	瀬地山敏 吉田和男
Aliya Kantarbayeba	George Washington University (Washington, DC)	進化経済学、カザフスタンの移行経済	八木紀一郎 吉田和男
Hans Peter Brunner	Asian Development Bank (Manila)	移行経済、南アジアの開発経済、制度経済学	八木紀一郎 吉田和男

退会者：中村量空、徐翠萍、荻沼隆、佐藤さおり、若森みどり、河合塾経済研究会（統合）

**書評『＜超脱皮＞企業を目ざす－サバイバルのための複雑系思考』
－中村量空（英一）氏追悼文－**

有賀裕二

複雑系研究に意匠をめぐらした物理学者・中村量空（本名、英一）氏は、福井県立大学教授在職中、平成13年（2001年）11月29日肝硬変で逝去された。昭和23年（1948年）12月14日生まれ。満53歳を目前とした享年である。シュレーディンガーの研究を重ねた量空氏は、華嚴哲学に造詣が深く僧籍をお持ちで、印度学仏教学会理事でもあられた。平成11年夏より何度か入退院を繰り返されたと聞く。闘病生活のなかで書き下ろされた『＜超脱皮＞企業を目ざす－サバイバルのための複雑系思考』（中央公論新社、2001年12月10日刊）は、悲しくも没後出版の遺著となった。この新著には量空氏のわが国の将来にたいする深い思いが込められている。

新著は、日本のビジネスマンのための今後の戦略処方箋を示した実践書であると同時に量空哲学の集大成でもある。平易な言葉を用いて深い哲理が示されており、随所で共感できる内容が盛り込まれている。新著のプロローグは「企業進化とは」で始まる。企業進化とは企業の＜超脱皮＞である。内容を若干紹介したい。

全体をとっても部分をとっても相似的な形状、つまり自己相似的な形状をフラクタルと呼ぶ。企業を例として、トップもミドルも現場もみな同じ行動様式をとるシステムはフラクタルだが、この場合、部分に自律性がないことは致命的欠陥である。一つの失敗は全体の

失敗となる。「各部分が自律性をもち、部分と全体が協同する」特徴をもつシステムを「複雑適応系」と呼ぶ。「二十一世紀のビジネス戦を競技にたとえるなら、多種多様な世界の強豪と闘うゴルフやサッカーのほうがより現実的でわかりやすい。」「強いチームは分散と集合の複雑化した陣形の変化で状況変化に適応するシステムでなければならない。」「複雑化した場」のなかで「利を以て動き、分合を以て変を為す」（孫子の兵法）が基本命題である。実際、現代の企業にとっては、それぞれ自律的な関係同志で「共創」（清水博）のネットワークを形成し、「新領域」を創出することがサバイバルの条件となっているのである。

そして本書の後半は、第5章「共創企業の変異－ホンダの戦略」、第6章「合併か提携か」、第7章「関係化のネットワークを創出せよ」と展開し、終章「現場との対話－久米是志・元本田技研社長と語る」で終わる。第5章「共創企業の変異－ホンダの戦略」における日露戦争「日本海の海戦」の例題はきわめて興味深い。多少長いが引用したい。

「命中率の低い当時の技術では、敵艦の一つを目標けて各艦が個別に砲撃すると、いくつもの水煙が混在して自艦の砲弾がわからなくなる。だから射程の修正も困難になってしまうのだ。これとは逆に日本の艦隊は、一艦の試射による射程のコントロールという方法に切り換えた。一艦の砲撃情報を得て、全艦が同じ射程で一斉に砲撃する。それで命中しなければ数分後に同じ過程をくり返すというわけだ。・・・日露海戦には「共創」を現実化する具体的なヒントが示されている。全軍一丸となって勝利をみざす目的の共有化。このままでは勝てないという危機意識の高まり。士官と下士官（異質の者）が協力し、砲撃に共通の責任を負う（平等性）攻撃システムの確立。日本の連合艦隊が創出した斬新な砲撃システムは、まさしくこのような「共創」のたまものだった。」（136-137頁）

実は、量空哲学は「華嚴縁起のダイナミクスを通じた因と縁のパラダイム」である。量空著『複雑系の意匠』（中公新書1440、1998年刊）によれば、「科学が常套としている原因の実体の研究は、結果に至る一つの道にすぎない。実体がなかったとしても、縁をもったシステムは結果に寄与することができる。」（168頁）これは清水博の「関係学」に連なる。実際、「清水の提唱した「場」は、物質系の科学で通常いわれている電磁場のような物質の場ではない。清水の「場」は、現実の社会で生成された情報のネットワークの広がりを意味している。華嚴縁起でいう「インドラ網」のようなものである。」（200頁）

実際、量空氏の新著は、量空華嚴哲学を企業経営と日本の将来に実践的に適用したまさしく「量空の兵法」であり、そしてまた見事に成功されたと思う。

私は、進化経済学会第3回大会（大阪市立大学）ではじめて量空氏にお会いし、量空氏が上記『複雑系の意匠』の著者であることを知らされた。眼光鋭い氏の眼差しのなかに「複雑系の哲学」を経済学に応用しようとする深い熱意が感じられた。すぐにちょっとした「縁」が生じた。ちょうど私が運営委員長を務める第4回中央大学大会（JAFEE2000）のテーマは「21世紀の学融合と進化経済学」であった。私はオータムコンファレンスのゲストスピーカーとして量空氏を招待することになったのである。ところが、開催日である1999年9月

18日の前日、量空氏は入院のため上京を断念せざるをえなくなった。せっかくの議論の場をやむなく放棄された量空氏はさぞ無念であられたと思う。しかし、氏は遺著おいてわれわれ進化経済学会会員にコンファレンスの責務をたんに果たされたばかりでなく、われわれに多くの有益なメッセージを残されたのである。

私は量空氏のように華嚴経に詳しいわけではないが、鎌田茂雄『華嚴の思想』（講談社学術文庫 827、1988年刊）を読み、社会ディレンマを表す「華嚴ゲーム Avatamsaka game」を考案した。（Jafee/Y. Arika(ed.), *Evolutionary Controversies*, Springer, Tokyo, 2001, pp.115-132.）これは一見、囚人のディレンマゲームに類似しているが、本質的に華嚴哲学の「関係性」を示している。量空氏と「華嚴ゲーム」についていろいろと議論したかったものである。なお、最後に、量空氏が1999年オータムコンファレンスのために準備されたメモを掲載し、ご供養としたいと思います。

中村量空（英一）氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌。（2002年4月5日）

【再録】 「複雑性の原理」 中村量空（福井県立大学）

1999年9月18日 進化経済学会オータムコンファレンス予稿(中央大学駿河台記念館)

1 複雑さとは何か？

「複雑さ」を「科学的」に解明するというのは魅力あるテーマである。しかしどの程度まで解明可能なのか？

E. シュレーディンガーによる「科学」の二つの原理。客観化の原理と理解可能性の原理。

「複雑さ」には主観的な要素が含まれている。理解可能でも「複雑」というのか？構成要素の量の多さや、計算時間の長さを尺度にして「複雑度」を測るという考え方は以前からあった。

「複雑さ」を「関心の高さ」に結び付ける考え方もある。簡単に理解できる場合と、まったく理解できない場合には「関心の高さ＝関心度」は低くなる。ほどよいむずかしさが関心を高め、「複雑さ」を実感させてくれる。

複雑なシステムの四つの特性。

- ・非線形性（エージェント間の相互作用）

- ・開放性（モノや情報などの流れ）
- ・適応性（変動する市場への対応）
- ・自己組織性（エージェントの自律的な組織化）

2 複雑度の指標

何を複雑度の指標にするか？

乱雑度の指標は「エントロピー」と呼ばれる量で、C. E. シャノンはこの量を、必要な「情報量」と考えた。乱雑度が最大の状態になると、でたらめに並んだトランプと同じように、まったく偏りがなくなってしまう。

逆に、秩序化したシステムには秩序化を示すマクロな量の指標があり、これを「秩序パラメータ」と呼ぶ。

「複雑さ」は「秩序」と「乱雑」のあいだにある。

乱雑な状態は、乱数などを用いた統計的な手法を使って処理することができる。秩序状態のほうは物理法則の理論で理解する

ことが可能である。

明らかな秩序があるわけではないが乱雑でもない。この中途半端な状態こそが複雑で、変化の予測が困難な状態なのである。

物理的に見た複雑なシステムの特徴。

- ・個々の要素はバラバラではないし、一つのクラスターに固まるのでもない。
- ・クラスターは多重のクラスターを形成し、それらがまた要素に分解する。
- ・システムの状態を表現する状態関数は変動する。

クラスターが形成する「階層構造のパターンの多さ」は、システムの「多様性」を表わしている。このパターン量が「複雑度の指標」になるだろう。

3 複雑性と時間

書評：吉田和男編著『複雑系経済学へのアプローチ』東洋経済新報社、2002年3月
中央大学商学部 有賀裕二

本書は、進化経済学会で活躍する若手の論文を主として適切に配置しているほか、編著者による「非線形システムと複雑系解析のための数学」にかんする付録が配置されている。とくに、この付録は、読者諸氏に大変有益である。イジングモデル（磁性体モデル）の協同行動の解法である「キューリ=ワイスの解法」が丁寧に紹介されている。「人々が自らの行動に対して最小化しようとするの評価関数は、自らの判断と周辺に対する人間関係のコンフリクトを最小化しようとする判断の合成であり」（175頁）、主流派はこれまで人間関係のコンフリクトを無視してきたのである。そしてこの解法はいまやウィスコンシン大学のデュアラウフなど主流派によっても積極的に取

複雑なシステムが厄介なのは、変動の長期予測ができないからである。株価の変動や商品の売れゆきなど、長期予測のできないものは一般に複雑だといわれている。

状態関数の振舞を「確率過程」として解析する方法がある。これはマルコフ過程と呼ばれるものである。マルコフ過程は、1ステップ前の過程に依存するだけで、この過程には過去の記憶はないし、過去の履歴に依存する要素はない。

しかし一般に、複雑な過程は何らかの形で過去を引きずっているものである（非マルコフ過程）。過去の履歴や記憶を状態関数にどのように取り込むかが重要なのである。

り入れられはじめたところである。付録以外の諸章でも、本書は、複雑系経済学の最先端を研究するのに直接役立つ基本的な概念および分析用具、クラシファイヤ（分類子）の話題と人工株式市場、アーサー、シルバーバーグ、その他の非線形経済変動のモデルなどを満載している。吉田が本書で指摘しているように、すでに経済学の外側で、新しい効用理論の分析用具は開発されていた。本書は題名のとおり、読者を「複雑系経済学」へ接近する途を開いてくれる。

「複雑系経済学」の範囲を適切に要約しておくのは、進化経済学の展開に重要である。evolutionの語源は「神の意志から展開されるべきものである」と教えてくれたのは、進化経済学会発足の前、まだケンブリ

ッジ大学在職中のホジソンが京都大学でセミナーをした時のことであったと思う。この指摘があったお陰で、私は「進化的とは何ぞや」という議論に関わらなくてすんだ。私は、進化経済学の「進化」は、主流派の均衡概念に基礎を置いた動学的経済学の時間概念にたいする批判として有効だと考えてきた。そして複雑系を対象とすることにより、従来の経済学モデルの単線的な舞台装置は当然変更を余儀なくされる。主流派理論の本質的な論点は、方法論的個人主義である。長い間、経済学の枠組みで仕事をしてきた者にとって、個人主義的効用関数の改変こそ課題であったはずである。そしていま、評者は、デュアラウフやブロックなど主流派経済学内部から効用関数の改変に乗り出しているのを見て、方法論的個人主義の「進化」していると感じるのである。

(進化経済学会第6回大会・有賀報告)

進化と適応は不可分の概念であるので、複雑適応系などは、社会システムの進化を考えるうえではちょうどよい題材である。サンタフェ研究所は、この点で、きわめて上手にいくつかの分析道具を提供した。一つはアーサーのポリヤの壺過程（もともとは伝染病伝播モデル）と正のフィードバックの理論である。これは「収益逡増と経路依存性」で経済学ではとても著名になったし、他の一つは、ホランドたちの遺伝子アルゴリズム GA などによる人工知能の接近であり、「複雑適応系」研究として著名になった接近である。アーサーとホランドはサンタフェで家をシェアしていたこともあり、彼らは実は研究課題もシェアしていた。共通の問題は two-armed bandit problem (スロットマシン選択問題) である。この問題

は、主観的に勝ちの確率がわかっていない2台のスロットマシンのどちらを選ぶのがよいかという問題である。この問題は1933年の統計学の問題にすでにあったが、ホランドはこの問題から出発して、GAに結びつけることができた。GAの効用は、ルールからルールを創出できるという点であり、実際、現代社会システムの進化の舞台装置によく当て嵌まっている。アーサーは、プレイヤーに見えないスロットマシンの性能を「歴史の偶然」という概念で詳細に整理した。もともとアーサーはホレス・ジャドソン著『天地創造の八日目』から靈感を得たという。アーサーにせよ、ホランドにせよ、そしてカウフマンにせよ、サンタフェの複雑系研究はともに「進化論的発想法」なのである。

ところで、ホランドの仕事で面白いと思うのは、ホランドはGAを議論する前に、「フォンノイマン経済成長モデル」を紹介している点である。この部分は、長年生産理論を研究してきた評者にとってけっこう目から鱗が落ちたところである。つまり、GAでは、「フォンノイマンの生産システム」をクラシファイアを定義する「ルールリスト」と見なすことができる。ここで、フォンノイマン経済成長モデルの研究が複雑系研究と結びついたのである。吉田の編著書でもフォンノイマン経済成長モデルが「自動機械」として登場している。この箇所では、ジョーゼスキュレーゲンのリサイクルモデルとの比較で議論されているが、複雑系経済学を研究するとき、過去の主要な経済モデルとの関連を忘れないことはきわめて重要な試みである。

Call for Papers 2002/5/10

**第7回進化経済学会東京（専修大学・生田）大会
報告募集**

開催日時：2003年3月29日（土）・30日（日）

開催場所：専修大学生田校舎9号館（川崎市多摩区東三田2-1-1）2階会議室フロア

テーマ：グローバル資本主義への進化経済学的アプローチ

今回の大会は、グローバル化の下で資本主義はどのように変わったか（変わりつつあるのか）、その下でわれわれの「生活世界」はどのように変貌しつつあるのか、果たしてわれわれの生活と文明はグローバル資本主義と「共生」できるのか、そのためにグローバル資本主義をどのように「調教」できるのか、そして進化経済学の観点からどのような見地を切り開くのか、といった問題関心から上記のようなテーマを掲げました。経済思想から複雑系まで、進化経済学会のメンバーの皆様方の多様な議論を期待しています。もちろんこのことは応募論文のテーマを制約するものではありません。

口頭発表セッションの区分と名称は、公募受付終了後に確定しますが、応募のご参考までに以下のテーマを挙げさせていただきます。

- (1) 資本主義との共存可能性（オータム・コンファレンスからの継続）
- (2) 制度進化の経済思想
- (3) 制度進化への経済史的アプローチ
- (4) 金融システムへの進化経済学的アプローチ
- (5) 技術革新への進化経済学的アプローチ
- (6) 制度設計と公共政策
- (7) 行動・知識・市場
- (8) 信頼・規範・慣習の形成論
- (9) 貨幣論・コミュニケーション論のフロンティア
- (10) 進化経済学と科学哲学
- (11) U-Mart
- (12) 実験経済学
- (13) 進化ゲーム
- (14) 経済物理学
- (15) マルチエージェントベースのアプローチ

- (16) 進化経済学/教科書作りの経験
- (17) 自由論題
- (18) チュートリアル・セッション

応募要領：報告希望者は、①希望するセッション区分番号と区分名、②アブストラクト（A4用紙2枚程度、キーワードを3ないし5をつけてください）を添えて、9月7日（土）までに、第7回進化経済学会東京（専修大）大会運営委員会宛にお送りください。採否の決定は9月末日までに行い通知します。なお現在、非会員であっても学会加入の意志があれば応募を受理いたします。採択された方は来年1月18日（土）までに、『進化経済学論集7』に掲載するA4版10ページ以内の報告原稿（カメラレディのプリントアウトとwordもしくはテキスト形式で保存したフロッピーディスク）をお送りいただきます。

○**郵送の場合：**〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学8号館4階 吉田研究室
進化経済学会東京（専修大）大会 運営委員会 宛
電話：044-911-0694（吉田研究室）

○**電子メールの場合（推奨）：** evoecon@isc.senshu-u.ac.jp

（メールで送信いただいた場合、受信の旨、返信いたします。送信後3日経過しても返信のない場合は、お手数ですが確認のメールをお送りください。）

ポスターセッション：以上に加えてポスターセッションも行われます。詳細は追ってお知らせします。

第7回進化経済学会東京（専修大）大会運営委員会

委員長・宮本光晴（専修大学経済学部：miyamoto@isc.senshu-u.ac.jp）

副委員長・石塚良次（専修大学経済学部：ishizuka@isc.senshu-u.ac.jp）

事務局長・吉田雅明（専修大学経済学部：yoshida@isc.senshu-u.ac.jp）

大会ホームページ（<http://www1.isc.senshu-u.ac.jp/~the0433/evoecon.htm>）

進化経済学会東京（専修大学・生田）大会 オータム・コンファレンス開催のお知らせ

「資本主義との共存可能性」というテーマで、本年度のオータム・コンファレンスを専修大学で開催いたします。下記の4名の方をパネラーとして、シンポジウム形式で行いたいと思います。会場の皆様との応答を含めて、グローバル資本主義をめぐるさまざまな論点が活発に議論されることを期待しています。

2002年 9月14日(土) 午後1時半～5時

会場 : 専修大学生田校舎 (小田急向ヶ丘遊園下車)
9号館2階

宮本光晴 (専修大学) 司会・問題提起

高増明 (大阪産業大学) 「もう一つの資本主義? : 政治経済学的分析」

原洋之助 (東京大学) 「グローバル資本主義の文明論」

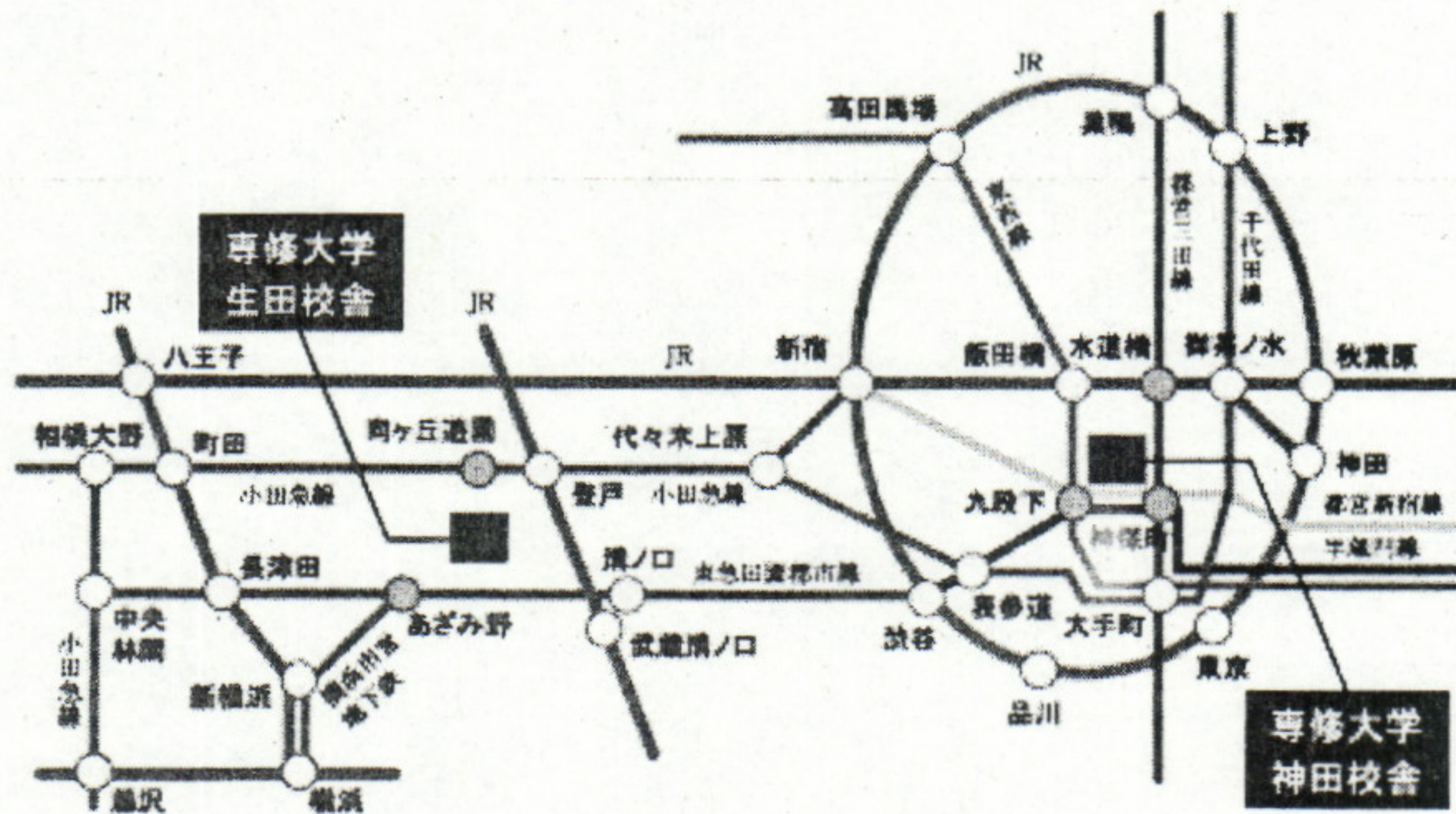
西山賢一 (埼玉大学) 「グローバル資本主義と複雑系-活動理論からのアプローチ」

山田鋭夫 (名古屋大学) 「グローバル資本主義とレギュレーション」

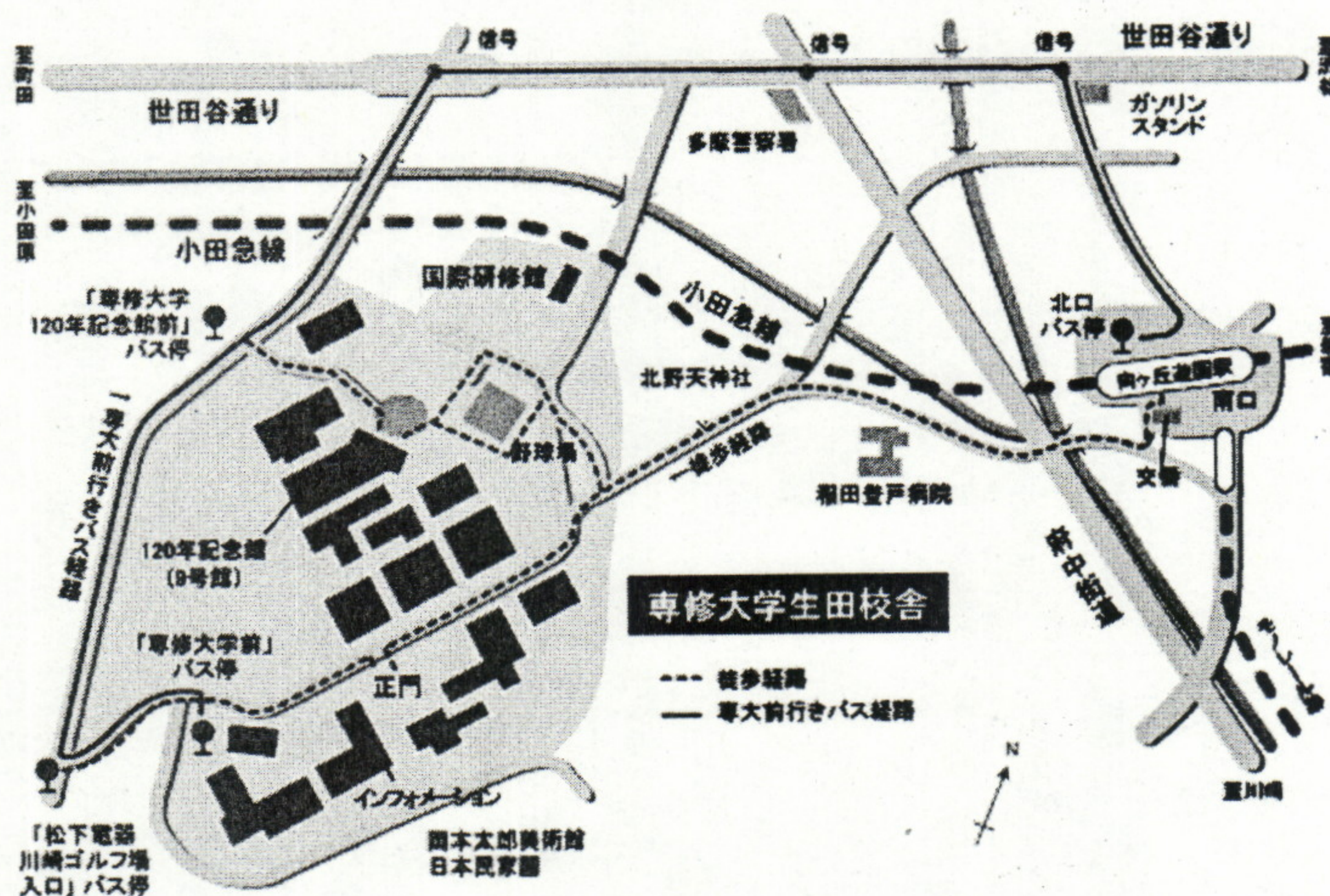
午後5時半から懇親会 : 9号館5階 Cabin

●専修大学生田校舎 (ご注意! 神田校舎ではありません!)

- ・ 向ヶ丘遊園駅 (小田急線) 北口より「専修大学前」行きバスで約10分→終点下車
- ・ 向ヶ丘遊園駅 (小田急線) 南口より徒歩18分
- ・ 向ヶ丘遊園駅 (小田急線) 北口より「専修大学9号館」行き100円 (専大生限定) バスも運行
- ・ あざみ野駅 (東急田園都市線・横浜市営地下鉄) より「向ヶ丘遊園駅」行きバスで約25分→松下電器川崎ゴルフ場入口、または専修大学120年記念館前下車



●向ヶ丘遊園駅から生田キャンパスへ



【関連学会案内】

複雑系とマルチエージェント国際会議 2002年9月9日-11日 中央大学多摩キャンパス
 (http://www.nda.ac.jp/cs/AI/cs02)
 The 6th International Conference on Complex Systems (CS02)
Complexity with Agent-based Modeling

Aims and Scope of the Conference:

We invite scientists who employ computational ideas and methods in their research and teaching to join us for the Sixth International Conference on Complex Systems (CS02). The conference will serve as a forum for sharing the most recent theoretical applications and methodological advances on agent modeling throughout the social sciences (e.g. Economics, Ecology, Political Science, Sociology) and among scientists in professional and in the public and private sectors. We are planning for a mix of plenary sessions as well as concurrent sessions on computational modeling issues, discipline-based research, and special topics to be proposed. We invite individual paper submissions and proposals for sessions. We also invite those who do not wish to present a paper to attend and will do our best to accommodate their requests. Please submit your requests early.

Chairpersons:

Prof. Akira Namatame (National Defense Academy, Japan : nama@nda.ac.jp)

Prof. David Green (Charles Sturt Univ., Australia: dgreen@csu.edu.au)

Prof. Yuji Aruka (Chuo Univ., Japan: aruka@tamacc.chuo-u.ac.jp)

Address for Correspondence:

Prof. Namatame or Dr. Hiroshi Sato (Hsato@nda.ac.jp)

Dept. of Computer Science, National Defense Academy, Yokosuka, 239-8686 JAPAN

Fax: 0468-44-5911

Paper Submission: Contributed papers will be selected for oral presentations by the Program Committee. It must be written in English and its total length of the paper should be no more than 15 pages and should be received by **15 June 2002**.

日経エコノフィジックス研究会・シンポジウム

日本経済新聞社主催：進化経済学会も後援団体に名前を連ねます

**金融・経済変動の制御を目指してーエコノフィジックスの応用
2002年11月12-14日**

研究会(参加限定) 11月12-14日 日本経済新聞社東京本社

一般公開シンポジウム 11月14日午後 日経ホール(東京・大手町)

オーガナイザー：高安秀樹(ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー)

清水季子(日本銀行金融市場局調査役)

倉都康行(リサーチアンドプライシングテクノロジー代表取締役)

H. E. Stanley(ボストン大学物理学科教授)

==== 英文出版 =====

Evolutionary Controversies in Economics:

***A New Transdisciplinary Approach*, Ed. by Yuji Aruka as a Publication of
Japan Association for Evolutionary Economics, Springer Verlag Tokyo, June 2001**

シュプリングー東京への直接注文による特価期間は終了しました。これからは、学会事務局宛にご注文ください。学会購入分を送料込み 5,000 円で頒布します。校費でのご購入の際は、必要な書類を注文の際にご連絡ください。

なお、2000年東京(駿河台)大会のペーパーをもとに編集された雑誌 NDPLS (*Nonlinear Dynamics, Psychology, and Life Sciences*) の特集号を学会で適当部数まとめて割引購入する予定です。これも学会事務局取扱になります。頒布希望の方は、ご連絡ください。

*******役員選挙のお知らせ*******

2003年4月からはじまる第3期の学会役員選挙がこの夏に行われます。選挙管理委員会から2002年6月現在の会員名簿（選挙権者名簿：長期会費滞納者は名簿から除籍されます）とともに、投票用紙が送付されます。どうぞ期間内にお忘れなく投票をお願いします。

事務局から：

<<会費納入について>>

平成14年度の会費納入（10,000円）をお願いします。大学院学生は会費半額（5,000円）ですが、同様の扱いを受けたい方は事務局にご相談ください。また、長期外国滞在などで一時休会の措置を取りたい方も、事務局にご相談ください。

今年6月に会員名簿刊行の予定のため、今号は会員名簿訂正は記載しませんでした。

なお、会費滞納の際の除籍規定の適用については、今号の理事会報告の第1項をごらんください。会費滞納のため名簿に名前が記載されていない方は、今回の役員選挙には参加できませんが、未納分を納入すれば会員資格を回復できます。

<<メイリングリスト evoecojapan>>

学会のメイリングリスト evoecolist は、昨年のウィルス騒ぎにまきこまれ、evoecojapan という名前にかえて継続しました。現在、登録会友（非会員の読者）を含めて約450の登録されているアドレスが登録されています。ポスト先は evoecojapan@econ.kyoto-u.ac.jp ですが、登録されているアドレスからの投稿だけを受け付けるようになっていました。運用は、majordomo でおこなっています。使用法については、学会のホームページをごらんください。アドレスの登録・変更・削除希望、その他何でも、管理者 (yagi@econ.kyoto-u.ac.jp) にご連絡ください。